

脱毛サロンに行ったらスタッフの女の子が初恋の女の子で、おちんちんを見られて笑われた話

中学の頃、同じクラスだった巴香のことが本当に好きだった。

おとなしい感じの子で、いつも授業中は前を向いて真面目にノートを取っていた。席が隣だった時があって、彼女の白いブラウスの隙間から薄いピンクのブラジャーが透けて見えた。それだけでドキドキして、放課後に家に帰ってから何度もオカズにした。体育の時間に体育着のズボンの隙間から白いパンツが

チラッと見えた日もあった。その記憶だけで、何日もオナニーした。

2度、告白した。1回目は文化祭の後、2回目は卒業式の前日。どちらも「ごめん、そういうの考えてなくて」と優しく、でもはっきり振られた。それから10年近く、ほとんど会うこともなく、巴香のことはただの思い出になっていた。

それでも、たまに夜中に思い出すと、あの透けブラとパンチラの映像が鮮明に蘇って、また手を動かしてしまう自分がいた。

25歳になって、ようやくVIOの脱毛を本気でやろうと決めた。夏になると蒸れるし、清潔感も欲しかった。ネットで評判のいいサロンを予約した。

受付で名前を告げると、奥から白い制服を着た女性スタッフが出てきた。

顔を上げた瞬間、息が止まった。

巴香だった。

中学の頃より少し大人っぽくなってるけど、目元も声も間違いなく彼女だった。

「……え」

僕が固まったまま声を出すと、巴香も一瞬目を丸くして、すぐにくすつと笑った。

「うそ……もしかして、山中くん？ 中学のときのだよね？」

「巴香……？」

「久しぶりー。こんなところで会うとかありえん」

彼女は少し照れくさそうにしながらも、昔の友達に会ったみたいな口調で言った。

「今日VIO初回だよね？じゃあ個室行くよ」

個室に通されて説明を受けている間も、なんだか現実感がなかった。10年ぶりに会った巴香が、これから僕のおちんちんを見る。脱毛するために直接触る。

「じゃあパンツ脱いでベッドに寝てて。タオルかけるから」

巴香のその言葉で、頭が真っ白になった。

「……あのさ、やっぱり別の店にするわ。ごめん」

立ち上がろうとした瞬間、巴香が苦笑しながら手を止めた。

「えー、気にしないでいいって。仕事だし。昔の知り合いだからって変に見たりしないよ。普通にやるだけだからさ」

「でも……」

「ほんとに大丈夫だって。リラックスしなよ、元クラスメイトなんだし」

その言い方で逃げにくくなった。結局、僕は震える手でパンツを下ろした。